

私の人の和（輪）ネットワーク

三十八年経済学部R組卒業

近藤節夫

◇国際化とは「思いやり」とみつけたり

近年世間では「国際化」という言葉が持て囃され、「海外へ行ったことがある」「外国に住んだことがある」「外国語が話せる」「外人の友だちがいる」といったような表面的な一面だけを捉えて、短絡的に「国際人」とか、「国際化」といつて安易に言葉を定義づける傾向があるが、私はかねがね「このような軽薄な風潮を苦々しく思っていた。」

「国際人」というのは、ずばり「相手の気持ちを慮ろうとする思いやりのある人」に他ならない。極めて簡単にして明快である。アメリカで教育を受け、ニューヨークに住み、米系企業であくせく働き、仮に自分の周囲がこれ全てアメリカ的であったにしても、肝心の思いやりに欠ける人は所詮「似非国際人」に過ぎない。

私は本年還暦という節目の年齢になって、これまで長きに亘って多くの人々に接することができ生業に従事しながら、惚れた仕事に専念できたことを虚心に喜ぶとともに、結果的に世界各地に多くの友人を得たことをつくづく幸せだなあと実感している。

そもそも私の友だち好きは、我が家の大家族主義と、父の転勤に伴う度々の転校に起因していると思っている。小学校一回、中学校二回の転校、高校も入学直前になり父の転勤により急遽転勤先の高校へ滑り込んだこと等で転校慣れしたせいもあり、あつという間に「いじめられっ子」成らぬ「遅れて来たいじめっ子」として、転校先のクラス内で覇権を握

ってしまった。

昨夏の甲子園で準優勝した京都府代表校・平安高校が前回全国制覇した昭和三十一年夏の平安高ナインは、私が半年間だけ共に机を並べ、喧嘩仲間だった平安中学の同級生たちである。日本各地の幼な友だちや、学友から吸収した熱っぽいエキスが私の人格形成と人脈構築に大いに与って力があつたものと考えている。

◇私の家族・異色の系譜

私の大家族について言えば、兄弟は僅か（？）五人であるが、父が九人兄妹の下から二番目のおまけの子であつたため、兄弟やその連れ合い、甥や姪の出入りでかなり生存競争が激しく、相当賑やかな家庭であつたようだ。私も子供の頃、いまは亡き伯父や伯母に遊んでもらったり、可愛がってもらつたことを今でも懐かしく思い出すほど楽しい家族であつたという印象がある。

私の父方の祖父は、文久三年（一八九三年）貧乏武士の小作として慶応義塾の町内・三田四国町に生れ、幕末の幼少時代はジョンマゲを結んでいたという。終生あまり余裕のある生活ではなかつたようだが、教育熱心で明治生まれの男女九人の子どもたちに一人残らず最高学府の教育を受けさせ、揃って大学、女子大を卒業させた。身鼻根かも知れないがあつた時代としては、中々進歩的な祖父だつたと密かに誇りに思っている。父の長兄が昭和の初めにドイツへ留学、ベルリンからドイツ

美人を連れ帰った時も、祖父母は一切反対せず、右も左も分らない異人さんを温かく迎え、当時としては型破りなほど物分かりのよい進んだ年寄りだった。当時、全東京中の新聞に「サムライの嫁に碧い眼」と喧伝され、物見高い隣組の人たちがドイツから輿入れした花嫁（つまり私の伯母）を垣根越しに覗きに来たという逸話がいつまでも語り種となっていた。

父の次兄にしても戦前からマニラ市内で手広く商売を営み、一時かなり羽振りが良かったと父から聞いていた。どうも性格が何事につけ外交的で、海外志向なのは伝統的な我が家の血筋に違いない。

そんなわけで、家庭の中でも父を中心とした人の輪が拡がり、私は子ども頃から多くの人の中へ入って行くことに、大して抵抗も感じなかった。父も兄たちの影響を受け海外志向の気持ちが強く、旧制中学時代には日本統治下の朝鮮半島に遊んだり、どれだけ分かっていったのか時折ドイツ語の詩を口ずさむことがあった。その父は終戦直後、房州の疎開先で私を年子の兄とともにアメリカ帰りの老人の下に英会話を習いに通わせたり、どこまで本気なのか私が物心ついた頃から「南米へでも行って一旗挙げてみる」としばしば型破りで無責任なことを言っていた。

見合い結婚した妻との縁にしても、つらつら考えてみるとどうも異色な巡り合せではなかったのかと思えてくる。結婚後に彼女の大伯母がああジョン万次郎の長男に嫁いでいたことを聞かされ、何か因縁めいたものを感じた。お陰で昭和五十一年アメリカ・マサチューセッツ州ニューベッドフォードのジョン万次郎記念館を訪れた時、当地の館長さんから大歓迎を受けるという余得に与ったこともあった。（その後、「ジョン万次郎の会」とかいいうサ

ークルがあるのを知らされ、私たち夫婦も入会のお誘いをいただいたが、会長が慶応義塾の後輩とは言え、あの小沢一郎と聞いて即刻断わった）。

◇ネットワークの仕上げ

さて、私は永年に亘り天職ともいえる旅行業に携わっているが、二十年程前から仕事量をセーブできる頃になったら究極の楽しみのためと、今迄の自分の人生を振り返ってみるために、仕事とは別に「ジョン万次郎の遠縁に当たる」妻と二人で世界各地の友人を訪ねながら、ゆっくり異国の地を自由気ままに旅を試みたいと思っていた。そしてそれがいつの間にか現実にならず世界各地にしっかりとした国際的な「人の和（輪）ネットワーク」ができ上がった。これからも引き続き素晴らしい友人との新たな出会いや、血沸き肉躍る感動が期待できるとは思っているが、いま構築しつつある国際ネットワークも私の活動余命から逆算してみるとそろそろ仕上げに入り、幕を引くべき潮時にきていると思い、私的なことで恐縮ではあるが我がネットワークのキーパーソンで、いままも広域的なお付き合いを続けているニューヨーク、リオ・デ・ジャネイロ、そして新生ユーゴスラビアのベオグラードでそれぞれ活躍する三人の国際人である友人の横顔を紹介少々私の人的ネットワーク形成に纏わる雑感を記して見たい。

☆日系韓国人の宋さん

①多忙な国際的ビジネスマン

三田で知りあった賢夫人に先立たれ、失望のあまり会社も辞め一念発起してニューヨーク

ク州公認会計士の資格を得たのもつかの間、四十才過ぎで早世した、当時ニューヨーク在住の学生時代の友人の紹介状をもって来日した時、私の家族ともども箱根を案内したことから宋さんとはもう二十余年に亘りお互いに家族同志の付き合いが続いている。

東京とニューヨークで年に一度は食事しながら旧交を温め、ヴィヴィッドで最新の問題を腹藏なく話し合うことを至福の時にしている。母親が日本人であったため、親日家ではあるが日本に対する観察眼は厳しく、且つ鋭い。早くに愛妻に先立たれ、十年ほど前若い韓国女性と再婚した。数年前までニューヨークの著名な大企業でシステムズアーキテクトとして、かなり旨味のある仕事をしてきたが、いまは独立して自分で特許の開発研究所を経営している。彼の、外から中々覗けない神秘的な一面は、北朝鮮政界にパイプを持っているらしいことで、私に胸襟を開きながらも政治的な公的トップシークレットについては、絶対に語ってくれることはない。

一昨年、南米からの帰り道にニューヨークで再会した折、彼は北朝鮮から帰ったばかりで私が金正日(キム・ジョンイル)党総書記の立場、判断力、影響力を問題視した時、共産主義者でもない彼が金正日の行動について論理的に説明して、金正日の政治活動については何らの不安も抱いていないと断言したのには些か啞然とした。彼の平素のバランス感覚から推して、私の勘では党総書記周辺と何らかの接点があり、世評とはかけ離れた真実(?)をある程度把握しているのではないかと勝手に想像している。彼は以前よりアメリカ外交筋ともチャネルがあり、今もアメリカ、ピョンヤン、ソウル、日本間を度々往来する多忙な友人である。私にとっては、師や兄のような実社会の指南番であり、私の拙い英語

の表現や、私の国際的スタンダードの判断についてもいろいろ教示してくれる。我が家の立派な百科辞典「メリット・スチューデンツ・エンスaikロピエディア」二十巻も彼を通してニューヨークの出版社より直接購入したもので。今も我が家の応接間の調度品(?)として重きをなしている。

かつてニューヨーク郊外の高級住宅地フラッシングメドウで幼い子女と若い奥さんと営む幸せな家庭を妻と共に訪れ、妻子に対して笑顔で温かく丁寧に接する一家の主の姿を目の当たりにして、「国際人」というのは、きっと彼のような人物のことをいうのではないかと私より五才年配の友人の今後の変わらぬ活躍を祈ると同時に、いつまでもいい友人関係を保っていきたいと心から願っている。

☆リオのカリオカ、アリンドおじさん

①ロンドンで知り合う。

知り合って早や四半世紀になる。その間、私かブラジルを三回訪れ、アリンド・フルタードさんが二回日本へやって来た。知り合ったきっかけは、ロンドンの観光バスに偶然乗り合わせたアリンドと南アフリカの某と私の三人が意気投合して、そのままロンドンの夜の巷を放歌高吟しながら彷徨い歩き、共に終生の友情を誓い合ったことにある。日本の義兄弟の契りを霧のロンドンで交わしたというわけだ。残念ながら南アフリカの某とは、あの国際的に悪名高いアパルトヘイトのせいで文通もとぎれてしまった(蛇足ながらアパルトヘイト廃止がことの是非は別にして、南ア国内で必ずしも一定の高い評価をうけている訳ではない。私自身、地下一、二〇〇米の金鉱山に潜った際、お節介にも試掘中の何人かの黒人労働

者に直接尋ねてみたところ、意外にも彼らは全員アパルトヘイト制度廃止に反対であったし、あるインテリの黒人ガイドの如きは、丁度滞在中にロスアンゼルス市内で勃発した、白人警察官による黒人への暴行に対する黒人の集団暴行事件を槍玉に挙げ、アメリカでもアパルトヘイトを実施していれば、こんな暴動は起きなかった筈だと露骨に廃止に反対のコメントを述べた。六年前に初めて南アフリカへ出張した時、あれやこれやを思い同じ空の下でいま某はどうしているだろうと暫し感傷的な気持ちに捉われた。

アリンドは、私より八才ばかり年長である。子どものように純粹で、優しいナイスガイである。医者で金持ちのくせにリオのコパカバーナ海岸にほど近い、さほど高級とも思えないマンションに一人住まいを通して妖しいカリオカである。一度彼の一室へ立ち寄った際には、アチラの方の趣味があるのではないかとおっかなびつくりだったことがある。

四年前の夏、我が家でテレビを見ながら、鹿島アントラーズで活躍中のジーコ選手のプレーについて、我れを忘れ興奮して、ジーコの素晴らしい人間性と円熟味のあるテクニクについて蘊蓄を傾けて解説をしてくれた時のあの嬉しそうで子どものような無邪気さは、ラテン民族そのものではないかと思った。私の妻も息子もそのド迫力にしばし呆気に取られてしまった。

②アリンドの優しい気配り

暇が出来ると世界中を回遊して、不意に名も知らぬ小さな町から珍しい絵ハガキを送って近況を報告してくれる。アリンドの心優しい気配りのひとつは、住所録に必ず友人・知人の生年月日を記してあることで、毎年誕生

日直前にはきつと誕生祝いの絵ハガキが世界のどこかから舞い込んでくることである。彼は、小さかった甥や姪にも何十年に亘り絵ハガキを書き続け、親しい親戚や知り合いの誕生日を祝福し続けている。私のところへも文化の日(私の誕生日)が近づいて来るとどこからともなく読みにくい、愛情溢れる絵ハガキが届く。私も旅先では絵ハガキを書くことが多いが、私の便りを書く習性も多分にアリンドに触発されている面がある。お互いが海外旅行中でも、彼の旅行が長期間に亘る時には、彼は友人宅や親戚の寄宿先を教えてくれるのでお互いに母国を離れても常に連絡を取りあっている。つい最近もニューヨークにやってくる彼と、バンクーバーへ行った私が電話で他愛ない話をしてお互いの健康を祝福しあった。

彼の私や、私の家族、友人に対する愛情と信頼を最も強く感じたのは、三年前のあの阪神・淡路大震災の晩のことだった。突然地球の裏側の彼から叩き起こすような国際電話があった。眠い目を擦りながら朦朧としたまま受話器を持った私へ放った彼の第一声は、「お前の親戚や友人は被害に遇わなかったか？だれも怪我はなかったか？」という私の知り合いへの思いやりのある短い言葉だった。私や家族が東京に住み、被害を被ることがないということを知ったうえで、私の親戚や友人の安否にまで気を配ってくれた心遣いには、正直いつて涙が出るほど嬉しかった。彼は直ぐ電話を切ってしまったが、私たちの友情は切れるどころか、益々固く結ばれていることは云うまでもない。

☆新ユーゴで活躍する同輩の山崎洋さん

①同級生の名通訳ぶり

昭和五十九年、文部省の教員海外視察団に
お伴して旧ユーゴスラビアの風光明媚な臨海
都市リエカ市に一週間滞在した時、初めて通
訳をお願いしたことが標記の山崎洋さんとの
最初の出会いとなった。当初は会社の先輩か
ら通訳として優秀だからと紹介されただけ
で、「添乗員としてそれは助かる」ぐらいの軽
い気持ちしかなかった。

しかし、私たちの付き合いは、この時の山
崎さんの見事な通訳ぶりを皮切りに今日ま
で地道に、だが着実に続いて来た。今後もあ
まり力まず、本当の友だち感覚で楽しく誠
実にコミュニケーションしていければお互いにとっ
て頼りになる、一層親しい友人関係へ発展さ
せることができるものと信じている。彼のア
カデミックな通訳ぶりは、全体の勘どころを
手早く汲み取り、それが本筋を捉えた内容
的にもこなれた格調の高い言葉に翻訳され、
結果的に視察団としての成果も上がり、テク
ニカルなツアーとして全団員はもちろん、関
係筋からも極めてレベルの高い視察団であっ
たと後に高い評価をいただく結果となった。
これは、山崎さんの類稀な通訳としての素養、
能力もさることながら、研鑽を積まれた専
門的知識及び教養、そしてその人柄に負うと
ころが大きい。

最初に出会った晩、仕事を離れ四方山話の
過程で、山崎さんが何と私たちと同輩の経済
学部1組の卒業生であることが分かった。お
互いに余りの奇遇に、一瞬まじまじと顔を見
合わせた。山崎さんが私を評して曰く「どっ
もどこかで見たような気がした」。彼のよう
に当時社会主義国の閉鎖社会で苦勞してい
る身には、余計懐かしいのか、思わぬ出会い
に感銘を受けたようだった。私自身にしても
海外で友人、知人に偶然会う機会は時折あっ

たが、このようなドラマチックな出会いに殊
更深い感動を覚え、最初の夜から毎晩ご当
地の地酒を酌み交わしながら、アドリア海を
臨む素敵なバーで夜な夜な同窓会を開く羽
目になった。

山崎さんの朴訥で、誠実な人柄から滲み出
る落ち着いた通訳ぶりは、団員はもちろん、
現地の人たちにも響くように伝わり、視察団
の訪問は現地の新聞でも大きく報道され、リ
エカ市滞在中の視察の成果は、団長が最大級
の賛辞を与えたほどのMVPものだった。

② 混迷のボスニア情勢

帰国後、例によって私は山崎さんへお世話に
なったお礼状や、出来上がった視察団の報告
書を送って折角築いた絆を大切に温めてきた
つもりであるが、山崎さんにとっては一九九
〇年代に入り、在住する国家の土台がぐらつ
き出し、日本からの渡航者も激減して、家族
の糊口を凌ぐことすら厳しい時代となった。
山崎さんから届いた一九九四年の年賀状に
は「インフレに加えて品不足が顕著になり、毎
日牛乳やパンを買うのに一苦勞です。インフ
レはついに二十五万%（九三年十二月）と世界
記録を更新しました」と書かれてあった。ユー
ゴスラビアはかつて、バルカン半島内の南スラ
ブ系の複合国家として独立国としての体裁と
体面を保ってきた。しかしながら、もともと
その拠って立つ基盤は脆弱で、七つの隣国、六
つの共和国、五つの民族、四つの宗教、三つの
言語、二つの文字に一つの国家として複雑な
バランスの上に辛うじて成り立ち、今日のよ
うな国際情勢の厳しい環境下で国家の舵取
りを行うこと自体、正に砂上の楼閣と云って
も良かった。一九九一年に入ると悲劇的分
離・独立が始まった。その後のボスニア情勢は、

「ご承知の通り国家を四分五裂に、民族を離散せしめ、緑の大地は瓦礫と化してしまった。今やビジネス客や観光客の訪問も一切なくなってしまう。山崎さんは日本人でありながら、生活のベースを今もベオグラード市に置き、日本と新ユーゴスラビア両国の友好関係の修復と発展のために、佳代子夫人（ベオグラード大学講師）とともに献身的な努力をされている。時々ラジオの短波放送や、新聞、雑誌などを通して時々刻々と変化する新生ユーゴスラビアのありのままの姿を日本へ送ってくれている。」

全国土が荒廃して戦火が完全に止んだとは言えない、今日のユーゴスラビアの地を旅行者が訪れることはほとんどなくなり、当分観光インフラの整備にも期待を抱くことはできず、ネットワークのキーポイントとしては大きな穴が空いてしまった。

私もその後バルカンの地を訪れる機会がなくなってしまうが、山崎さんは判で押したように毎夏、講演を兼ねてご健在な母上、山崎淑子がお住まいの横浜市の実家へ里帰りされる。私は山崎さんが帰ってくると必ず会って、旧交を温め合い、お互いの健勝を祝い、ボスニア情勢の最もホットな内実の話の間かしてもらうことを最大の楽しみにしている。巷間伝えられているボスニアの表の報道の裏に隠された真実の話は、赤裸々で国際的な社会問題に疎く、敬遠しがちでいつも傍観者的立場をとる私たち日本人に対して、目を覚ましもつと広く現実を見よと叱咤しているように感じられて仕方がない。停戦前のボスニアでは、アメリカを始めとする各国の高圧的な空爆論が圧倒的に優勢な中で、話し合いによる解決策を推進する国連ユーゴ機関代表部明石康代表が、オルブライト米国連大使（当時）の逆鱗に触れ、その職を解任されるとい

う強硬なムードが支配的であった。私がある時母上に電話をすると「アメリカが余計なことをするもんだから」と仰ってこぼしておられた。案外この言葉が忍耐ぎりぎりの生活を余儀なくされているバルカン半島に住む市民の本音を吐露しているかも知れない。

③友好のかけはし

山崎さんのユーゴスラビアとの関わり合いは、少々生臭くなるかも知れないが、日本のスパイ事件史上衝撃的な「ソルゲ事件」と深く関わっている。三年前の秋、朝日新聞全国版に三日間連続で山崎さんの家族が紹介されたので、記憶に新しいところだが、山崎さんの父上はあのソルゲ事件に巻き込まれ、不幸にして北の果て網走で亡くなられた旧ユーゴスラビア民族主義の生みの親のひとりであった。いまも山崎洋さんは、本名の他に（武家利一）というペンネームを名乗ることが多いが、これは取りも直さず父上のユーゴスラビア姓（ブケリッチ）をトレースしているからに他ならない。いま山崎さんは、佳代子夫人ともども日本と新ユーゴスラビアの間を行き来しながら、両国の細い小さなかけはしとなるべく悪戦苦闘している。新ユーゴの出入国も思うようにはならないようだ。首都ベオグラードからほうほうの体で陸路によりウィーンなり、ブタペストへ出た後に空路で日本へやって来る。出国すら中々一筋縄ではいかないとぼやいていたことがある。他人がまず真似できない山崎さんの偉いところは、僭越に云わせてもらえば夫婦揃って確固たる信念と生きるための生活信条を持っており、足場を父上の母国ユーゴスラビアにしっかり置いていることである。危険と背中合わせの生活の中で、物理的な日常生活の不便を甘受することに何らの

懸念も感じていないかの如き超然とした彼の生活感、生きるための哲学は、同輩である私如きがとても足元に及ばぬほど「人間の格」が違うということを確認しないわけにはいかない。明らかに山崎さんは、父の母国ユーゴスラビアと母と自分の母国日本のかすがいとなくべく、二つの国の間で取り敢えず捨て石となつて、小さな「かけ橋」を架け、これを少しずつ太くしっかりした橋へ架け替え、いつの日にか両国の間にけれん味のない友好親善のうねりを作り上げていくことを最終ゴールとする、ひたむきな情熱を強く感じ取ることができ

る。

今は、私とて妻とのんびり「人の和(輪)ネットワーク」を訪ねてベオグラードへなど行ける環境下ではない。私としては、当分の間山崎さんが日本へ戻つて来る夏休みの再会を期待したり、手紙のやり取りを楽しみながら、いつの日にか新生ユーゴスラビアにも平和が訪れ、その時こそ妻ともどもあのアドリア海に臨む美しいリエカの街を訪れてみたいとその日までネットワークを精一杯構築し続けていきたいと考えている。

同輩緒兄妹におかれては、同じ三十八年卒業の同期生として卒業直後に旧ユーゴスラビアに渡り、爾来四十年近く動乱戦火の中で異邦人として悲惨な状況を目の当たりにして、辛酸を嘗め尽くした山崎さんとご家族を力強く励ましてあげることが同級生としての友情だと思ふに至り、杉田士郎さんが作つてくれたこの機会を利用してもらい、一人でも多くの方が激励の便りを差し上げていただき山崎さんを勇気づけてもらえるよう特にお願いする次第である。

◇友人たちとの邂逅

私は、ここに永年のお付き合いの中で、私を勇気づけ、精神的に支えてくれ、ともに信頼し合える三人の友人を紹介した。

「月日は百代の過客にして行き交う人もまた旅人なり」(奥の細道)

学窓を去り、早や三五年の月日が流れ去つた。その間人生のあらゆる場で多くの友と相まみえる機会を得ながら、ある者はいずこにか去り行き、またある者はいまもともにいる。いま己の周囲にどれだけ信頼できる友がいるだろうかと考えてみる。幸い私には今も多くの友、信頼できる友がいる。陰に成り日向になり私を支えてくれる。いつも切磋琢磨してお互いを磨いているつもりである。そんな友人たちに支えられて心から幸福感を覚える。

◇寄る辺のない不安感

ひとつ私の体験上、気のついた特異な例を紹介しようと思う。旅行業者に転ずる前の一九六七年の暮れ、私は半年前の第三次中東戦争(一説に六日間戦争と呼ばれている)の影響で戒厳令下のスエズ運河にいた。

明けて正月、南イエーメン人民共和国(現イエーメン共和国)独立の翌日、私は独立後最初の日本人(多分)としてアジスアベバからジブチ経由で独立前の入国ビザを持って非公式に南イエーメンのアデンに入国した。

その時ふたつの都市で私は、大きなショックを受けた。唐突だが、私はその時いずれの市内でもほとんど女性の姿を見ることがなかった。不思議であり異様な光景である。私はそれまでもアラブの国々を何度となく訪れ、市街でチャドルという頭巾を被つた女性を数多く見てきた。アラブ人女性が他人から顔を覆い隠す独特の風習は、目に慣れない内は特異な風俗と思っていたが、慣れれば格別

の違和感はなかった。街の中に溶け込んだ地方文化はむしろ斬新ですらあった。それがスエズでもアデンでも当然あるべき男女二つのグループの内、女性グループが完全に蒸発しているのだ。これは如何にもおかしい。戒厳令に加え、戦争地の橋頭堡・運河の街スエズでは特別立法により、居住するのは兵士であり、成人男子ばかりであった。老人や、女子、子供を疎開させてしまい、まったく街の中で女性の姿を見かけることはなかった。本来あるべきものがない。いるべきものがない。何かがおかしい。何なのだろう。心理的に感じるバランスが崩れているということは、多分こういうことを指しているのだろう。大袈裟に云って異常な事態だと思った。

「このことは、現場の臨場感を悟った私の生の体験上言えることであるが、如何なる動物の世界でも自然の摂理として男と女がそれぞれ相半ばする割合で生存していることは言うまでもない。このバランスが極端に欠けた世界に暫くいると、まず感覚がおかしいと感じる、そして視覚が少しずつおかしくなり、三次元の世界に閉じ込められた錯覚に陥り、少しずつ精神の安定が崩れてくる。私自身は、当時最初は女性の姿を見ないこと自体をおかしいということには気がつかなかった。理屈を抜きに感覚が先に感じてしまう。何か街全体の雰囲気とバランスが何かおかしいぞ、それにしても女性の姿が目に入らないなあと感じ、結局気付いたのはアデンに入国した後、再び女性のいない異様な雰囲気思わず、「このアンバランスが変だ！」「これだ！」と悟らされた。私かあの時、もしアデンに行かなかったらあの妙な違和感と呼べばいいのか、精神的に感じた戸惑いには結論が出なかったかも知れない。

◇友だちは幸せのキューピッド

話が飛躍するが、友だちのいない人、極端に少ない人には、本人はもちろん周囲にもある種の違和感を感じさせる特別な雰囲気というものがあるに違いないと思っている。

しかし、案外本人とその周囲は気がついていない。友だちや大勢の仲間と話し合う機会、接する機会が多い人ほどバランス感覚が磨かれ、世界が拡がり、大勢の人々との交流を求めたくなるものであると思う。

人生の充実感は友だちの多い奴が勝ちだとさえ思う。良い友だちと巡り合った方がどれだけ幸せであろうか？良い友だちに恵まれた人生はパラダイスだ。

在日ブラジル人の友人で元日産のサッカー選手だったアデマール・マリニョがよく言っていた。「ブラジルではサッカーを始める最大の動機は、友だちを作るためだ」そうである。ブラジル人の言やよし。金儲けや、有名人への憧れなんかではないのだ。

「ご同輩の皆さん、限られた人生で、しかもすでにその人生の道半ばを過ぎた今、人の和（輪）を着実に拡げ、家族や大勢の知人、友だちと一層仲良くしてこれからの人生を二倍にも、三倍にも充実させて大いに楽しもうではありませんか？